

社会包摂が置いてけぼりした「孤独」、 ねじれた世界のままだに生きる。

本橋仁

『人間椅子』あるいは『箱男』。あの2つの小説に描かれる偏執的で、一方向通行の愛もまたコミュニケーションと再び呼ぶことができるなら、私たちのコミュニケーションはより豊かなものになるだろうと思う。場所も、時間も、超越するコミュニケーションは過度な双方向への反省のもとにしか、きっと獲得出来ない。
大崎晴地さんの「ねじれの巡礼」を体験し、あらためてコロナの第n波で疲れ切ったときに、ふとそんなことを考えた。

コロナ直前まで、私たちは人間関係の双方向性が社会を良くするものと、なかば関係性を強要されてきた。コミュニティカフェが街に点在し、神様のいない祭りが広場を頭で埋めた。そして社会包摂は孤独を解決するためだと、ミスリードもたくさんなされてきた現代である。そうした「社会派」は、ネットで顔と声だけを交換するには満足ならず、「コロナが明けたら...」と毎夜寝言を漏らす。私はコロナを人類が克服した暁に、神様がくれるという「絆」というご褒美に恐々としている。社会は、そんなクモの網のように張り巡らされた絆の網に嬉々として絡め取られた幸せな人たちだけで構成されているのではないだろう。孤独を愛せと言っているのではない、少数派だとしても、わたしは大崎さんの作品に孤独を愛する、あるいは求める人たちへの救いを見出したい。

この作品が生まれた背景を紹介しておこう。

大崎晴地さんの作品は、2020年度に文化庁と京都国立近代美術館とが主催した「CONNECT⇄」という企画のメインプログラムの一つとして制作された。私もその経緯に関わっていたこともあり、大崎さんに与えられた課題は知っている。

2020年は新型コロナウイルスの感染拡大防止のために、世の中ではすべての交流活動がストップした。このCONNECT⇄もこんなことになる前に予算化され、「ワイワイ、ガヤガヤ」イベントが乱発されることが予想されていた。そのなかでのコロナである。ウイルスがやってきた。

そこでCONNECT⇄では企画の一部はオンラインを余儀なくされていく。やむを得ない措置の中で、主催である我々も戸惑っていた。そこで、いままで「普通に」やってきたことを（組織的にそうした含意はなかったにせよ、個人的には）皮肉を込めて「オフライン」という言葉を使い、オフラインイベントと銘打った。そうしたなかで、この両者の分断を避けるために、オンラインとオフラインを行き来する作品を作りたいというのが、大崎さんに依頼したテーマであった。要は、コロナで思考停止した私たちのモヤモヤを、大崎さんに全力で無茶振りしたわけである。

そして、大崎さんはウェブで閲覧可能な映像作品と、またオフラインとして京都国立近代美術館のホールに設置された「ねじれの巡礼」という作品、さらには京都各所を巡礼地と見立てたマップを制作してくれた。その仔細はきっと別で述べられるであろうから、ここでは割愛する。

話を戻そう。

大崎さんの作品の銀色に光る被膜は、いわゆる「エマージェンシーシート」である。かぶると暖かい、緊急避難セットに入っているあれ。そのシートによって作られた被膜の内部に潜ると、外から見た時の印象は一変する（私はあのようにエマージェンシーシートが一方的に視線を通すという、まるでマジックミラーのような効果を持つとは知らなかった）。中に入れば、私という存在をそこから消しさる。そこは、外からの視線がまったく遮られ、中にいる人の存在感を消しさる。また天井からバネで吊るされた石は、この被膜すれすれで落下を止める。その落ちる直前の石が被膜を押しつぶし、それゆえに内部に空間に変化を与えている。内側から向けられる視線は、外にいる人々、その奥に広がる空間を一方的に眺めるだけである。私たちは、そうして生み出された内部空間のなかで、“消失する”。

内側から送られる一方的な視線。その視線には、なんら外の人たちへの要求は無い。見田宗介「まなぎしの地獄」（『展望』所収、1973）のなかには、都市という場所に居場所を失った永山則夫死刑囚の絶望が描かれる。何者かであることを強要される自分が、何者でもない自分になれる場所として希望をもって逃げた東京。しかしアノニマスになりきれない状況に絶望する。ついに訪れた平穏は、連続殺人犯として入った独居房のなかであった。戦前の日本の戸籍制度は「家」を単位とした、前近代の封建国家の尾を引いていた。それが戦後の戸籍法の改正とともに、近代的個人主義がようやく日本でも根付いていく。こうして「個」が尊重される一方で、行き過ぎた個人主義は同時に「孤独」も副産物として生み出した。超高齢化社会の訪れとともに社会問題となり、冒頭述べたコミュニティへの希望という反動をもたらしていく。社会が孤独を助けること、これは相互扶助の観点から

いっても当たり前だろう。むしろ、わたしは永山死刑囚にも同情したい。繋がることによって生み出される生きづらさ、生きやすい孤独のあり方はないものだろうか。建築家横文彦は、時折レクチャーでジョルジュ・スーラのよく知られた作品『グランド・ジャット島の日曜日の午後』（Un dimanche après-midi à l'île de la Grande Jatte）を紹介する。この作品に描かれるのは誰もがセーヌ川を見ている風景であるが、視線はお互い交差しない。誰もが独りである。こうした孤独の都市のあり方もあるだろうと、青山スパイラルを例示する。奇しくも、京都国立近代美術館の大崎さんの作品の設置されたこの空間もまた、スパイラルと同じ時期に設計されたものだ（青山ほどの都市ではないにせよ）。孤独のための装置が、スーラへの憧憬を重ねるホールに生み出されたのは必然だったろうか。

大崎さんの作品にはコミュニケーションの一方通行を肯定してくれる居心地の良さがある。それに加え、自ら人格を剥奪し、形而下でつながるすべも残されている。それは社会的孤独を担保しながら、動物以前のコミュニケーションと言ってもいいかもしれない。社会はこれを許さないが、社会を経験する以前の世界で、私たちはそれを知っている。

吊るされた石は容易に、動かすことができる。ただ石は先に述べたとおり、内部空間の存在規定そのものである。自らの居場所を、その手で揺るがす。向こう側との唯一の通信手段が石であった。ここに言語は媒介としない。それはクレーンほど生理的なものではないし、ある意味を持ちかけた喃語とでも言えようか。

大杉栄『獄中記』（1923）のなかで、彼が治安維持法により検挙され投獄された豊多摩監獄での会話について語っている。ここに集まる思想犯が、お互いの存在を知ら

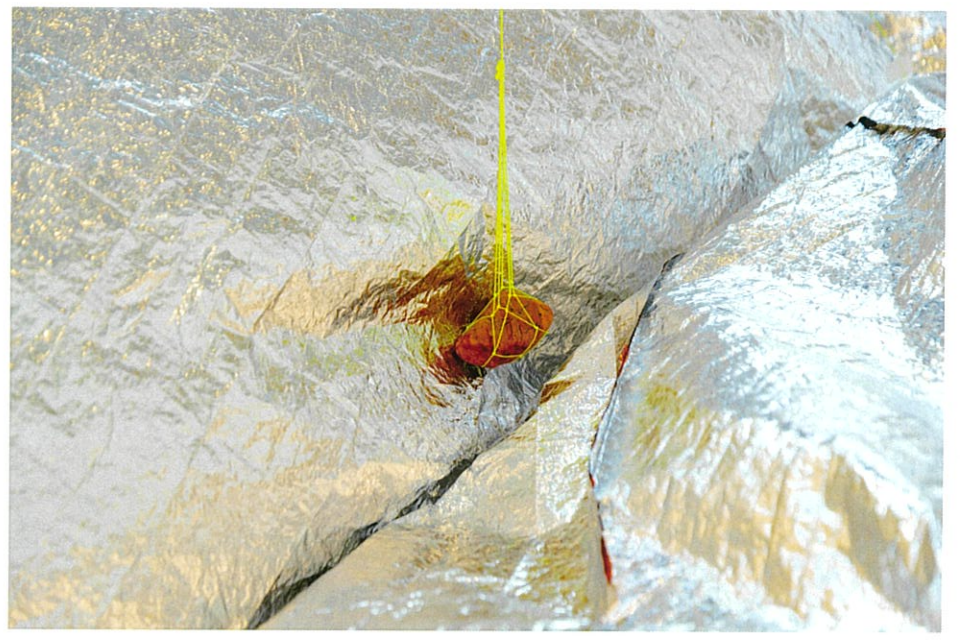
せ合うために使われたのが「コツコツ」である。豊多摩監獄に投獄され、社会の凶器とされた言語を奪われた思想犯達。彼らが監獄におけるコツコツと、冷たい壁（それは煉瓦で出来ている、温もりなんてない）を叩き、隣の孤独と交わす声なき声。そこに視線のやり取りもなければ、笑いも笑顔もない。ともに孤独のなかで生きているが、孤独なコミュニケーションのもとに彼らは自らの存在を確認する。

大崎さんの作品にもぐり、寝転ぶ。風によって大きなリズムで波打つシートは、轟々と音を立てている。そうして生み出されたホワイトノイズに不快感はない。私はどこかでこの感覚を知っている。被膜の内側にいた10ヶ月を、きっと私たちは思い出せないだけだ。内側から外へと伸ばす手。それにより歪む母体。それだけのやりとりのなかに、どれほどの生への希望が溢れているのだろう。『人間椅子』『箱男』ほどに愛に溢れた作品は寡聞にして知らない。これをコミュニケーションと呼ばず、愛などあろうか。

もとはし・じん／京都国立近代美術館・建築史家



photo_Yuki Moriya



photo_Yuki Moriya



photo_Yuki Moriya

HARUCHI OSAKI

2020

ねじれの巡礼

